野枝さんのこと

平塚　明

この一ヶ月ほど夢のやうな恐ろしい出來事におそはれ通したことはありません。そしてその最後に來たのが『大杉氏外二名』のあの不祥事件です。私は自分の頭や神經が變になつて行くやうな氣がします。

私がこの不祥事を耳にしたのは新聞で發表されたよりは三四日も前のことでしたが、私はそれを容易に信じませんでした。私に話した人は確かだと言ひましたけれど、それでも風説の多いこの際だ、と私は疑つてゐました。といふのも矢張り信じたくなかつたからでせう。

併し今となつては何と言つても確かな事實です。私は言ふべき言葉もありません。

もう十年も前のことですが、知人に姓名判斷をする人があつた關係から、私もその當座ちよつとした興味で、自分の周圍にゐる人達の姓名を調べて見たことがありましたが『伊藤野枝』といふのは精神の動搖絶えず、劍難あり、平和な最後が遂げられぬ人といふやうな事でした。(なほ他のこともあつたやうですが私は今この二つ丈がはつきりと思ひ出せるのです)併しもと〳〵かういふことに信を置いてゐた譯でもなし、又十年後の今日の野枝さんを豫想することなどは出來よう筈もない私は別に氣にはとめて居ませんでしたけれど、何かなしに野枝さんの爆發しやすい、ゆとりのないと言はうか、思ひかへしのつかないと言はうかあの情熱的な、主我的な氣質性格から考へて、多少あたつてゐるなとか、さもあらうとか言ふやうな氣はしてゐました。そして『絶えず心の動搖してゐる人！何たか少しあたつてゐるやうだわね』などと、私は異性に動かされ易い野枝さんをひやかしたり『疊の上で死ねさうもありませんよ、用心なさい。』などと、冗談を言つたりしたこともありましたつけ。併し幾人もの小さい人達のお母さまとなられたこの數年間の野枝さんは知りませんが、あの頃の(十七八の)まだ母としての體驗をもつてゐられなかつた野枝さんは『疊の上で死ぬやうな』平凡な生涯よりも疊の上で死なないやうな生涯にむしろ胸を躍らせ

てゐた人なのでした――あの當時の若々しいロマンティックな憧れから、何かしら英雄的な素晴らしいものに心を奪はれてゐた野枝さんは、そして理屈なしにロシヤの斷髪の革命少女を思はずにはゐられなかつたやうな野枝さんは。

いづれにしても一昔前のふたりがほんのなぐさみごとにしか考へてゐなかつた姓名判斷がかうもあたつたといふことは不思議なやうな恐ろしい事です。悲しいことです。若し一人の人間の運命といふものが最初からちやんと定められてゐるものだとしたなら私はなほ更言ふべき言葉を知りませぬ。

大杉氏と同棲されてからの野枝さんを殆ど知らない私の野枝さんの思ひ出は皆ふるい事ばかりです。そして私の心に一番鮮に生々と殘つてゐるのは初對面の時の印象です。野枝さんについての私の總ての記憶がうすれ行つてもあの時の野枝さんたけは、私の心にいつまでも私の野枝さんとして生きてゐるに相違ありません。たしか大正元年の夏のことでした。十七の野枝さんはひつつめの銀杏返しに結つて、赤い半幅帶をちよきんとしめた誰だつて可愛がらずにはゐられないやうな純な生々とした田舍娘でした。野そだちのやうな自然さと大膽さと無邪氣さをもつた態度、健康な肉體、血色のいゝ頰、のびやう〳〵とする生命そのものの輝きのやうな張りきつた黑目がちの眼、私はほんとうにあんな氣持のいい娘さんはないと思ひました。ところがまるで子供のやうなこの娘さんの口から强ひられていやな結婚をしたこと、併しどうにも夫である人がいやなので家出上京して、自分の尊敬し且つ愛してゐる先生のお宅において貰つてゐることなどそれからそれときかされたとき、私は驚かずにはゐられませんでした。何といふ早熟な娘だらう、と。けれども私はちつともいやな感じはしませんでした。むしろその生一本さと年に似合はぬしつかりした考へに動かされた位でした。

野枝さんを見た最後は大正七年の矢張夏でしたでせう。友愛會婦人部が婦人勞働顧問の田中孝子さんに對する反對演說會を開いた時でした。會が終つて私達は控室へ行くとそこに野枝さんがゐました。野枝さんは田中孝子さんを見ると待つて居ましたとばかり『あなたはまだ子供を產んだことがないでせう。子供を產まない女に產前產後のことがわかりますか。』と喰つてかかるのでした。孝子さんもこの態度がひどく癪にさはつたらしく胸をつき出し、口をまけ、眼をつり上げ負けぬ氣を見せて應

じました。私はたまらなくいやな氣がしました。反對すべき理由があるなら靜かにそれをいへばいいではないか、何もあんなギク〳〵とした憎さげた態度をする必要はないのに。何といふ心のすさみ方であらう。私は憎惡と反感の外何ものもないやうな野枝さんを見てはゐられませんでした。そして私はどうとうその仲へ入りました。――今思へばこれが最後なのでした。

この夏野上彌生さんから、少し涼しくなつたら『青踏』の頃の昔友達と一度寄り合はうといふお話が出てゐました。今度の大凶變さへなかつたら、きつと今頃は野上さんのお宅でその集りがある筈で無論その中には野枝さんもまざつてゐるのでしたのに。――

野枝さんは親に緣のない方でした。ふた親とも生きてはゐられたやうでしたが色々の家庭の事情は野枝さんから親の愛を奪つてゐました。野枝さんを育て、野枝さんを愛してゐたのはお母さまでなく一人の叔母さまでした。

お母さまの愛を知らなかつた野枝さんも僅か十年の間に六人の小さな方々のお母さまになつて母の愛といふものを十分知られたことでせう。けれどそのお子さん達はお母さまと同じやうに矢張り親の愛に惠まれることの出來ない不幸な方達でした。二人のお子さんはお母さまが生きてゐられたにも拘らずその愛を早く奪はれてしまひました。四人のお子さんは今又お母さんのみならずお父さまでも同時に失はねばならなかつたとは。

私は野枝さんがこの世に殘して行かれた大勢の幼ない方々の御身の上を思ふとき涙なしにはゐられません。併しこれも何かしら定められてゐた運命なのでせうか。

私は野枝さんのお子さん達がお母さまの愛に代るべきものの愛の下に幸福に成長されることを祈らずにはゐられません。

（一二―一〇―四）

野枝さんを憶ふ

安谷寛一

私は野枝さんに對しても懐かしい追憶のほかなにも持たない。同志達の間では、野枝は高慢ちきだ、いばりやだ、氣ごり屋だ、と云ふ評判が高く、野枝が居るために澤山の同志が大杉から離れる、と云ふ話は餘り少くなつた。少くないどころではなく殆んど大ていの同志の口に上つたことだから、恐らく間違のないところなんだろう。だが私は、どうした加減かそう思ふような場合に出會さずに濟んだ。

それはほかでも云つた樣に、私が大杉等に交はつたのが、無政府主義運動と云ふ樣なものに關してではなく、本當に家族的な交はりだつたからだと思ふ。大杉も殊にそうだつたが、野枝さんと會ふと、第一番に私の子供の事を氣づかつて、惣領の男の子や次ぎの女の子の事をたづね出す。それから其の子供等の着物や玩具のことまで、それは事細かに訊ねて、英國あたりから取り寄せた洋服の本などを家にことづけなどもした。家の經濟や、親達の私に對する心配に就いてまで話し出して、私にとつては、どこまでも親切な姉さんだつた。

だから、野枝さんが一度須磨に泊つた二度とも、私は子供を連れて野枝さんの宿に訪ねた。その須磨に泊ると云ふのも、私の家の近くに、と云ふのでだつた。コルゾフの見送りに來た時など、コルゾフにも餞別をやり、旅費も近藤君から私の所に電報爲替で送つて來てたんまりあつたのに、なるべく私の家に泊りたいと云つてせがまれた、がせまい私の家には、あひにく客まであつて其の望みを容れることが出來なかつた。ぜいたく家の大杉や野枝さんも私と接した時は必ずしもそうでなかつた。いばりやの野枝さんにも拘らず、その時など、まだ小便たれの私の幼い娘を抱いて須磨を歩き廻つたりもした。一昨年大杉の迎へに來た時も、その小娘に、自分の箸で小蕃を刺して食はせたりして直ぐと良い小母さんになつてしまつた。かへつたら洋服を作つて送つてやると云ふ約束をしたが、それはどう〳〵話だけが此の世に置きみやげと云ふことになつてしまつた。

私が鎌倉の大杉の家で一ケ月足らず過した時もよく私の家の話が出た。まだ其頃では見たこともない、まだ生れて間もない私の惣領息子のことで、あなたはアカちやんの事が氣にならない？　とよくたづねてゐた。丁度その頃、野枝さんはダア井ンの航海日記の飜譯をしてゐたが、その傍で寢はらばつて雜誌を讀んだり午睡したりしてゐる私に、その難解な箇所をよく尋ねた。それが餘り熱心なので、つひ引き入れられて、ほかの字引をひいて見たりもしたが、なんでもそれは船や航海上の專門語のやうなものなので、たいてい好い譯語は見つからなかつた。が高慢ちきな氣ごり屋としては、餘りに正直に勤勉に尋ねられたものだと思つた。

そんな風で、私の記憶にある野枝さんは私には好い姉さんであり、子供には好い小母さんであつて、少しもいばりやでもなんでもなかつた。九州との往きかへりには、神戸驛では停車時間が短かくて話す間もない、と云ひながら、山北あたりから電報で通過時間を知らせて來た。私もよろこんで驛まで會ひに出かけた。然し一とつ丈け私にも不愉快な憶ひ出が殘つてゐる。

それは一昨々年の春、信義（和田）と一緒に逗子の家を訪ねた時の事だ。大杉は東京の本屋の主人なんかと散歩に出かけて留守のこと、信義は玄關のあたりで、大阪から來てゐる小西、山田、それから當時大杉のその家で料理方をしてゐた伊世奈等と何んだか高聲に議論してゐた。私と野枝さんとは茶の間と云つたような部屋で、いつもの樣な話を演ませてから、寫眞の話が出た。近頃こんな道樂を始めたと云つて、大きな箱に一杯の寫眞を、それ〴〵説明しながら見せてくれた。どれもこれも大てい下手くそだつた。その話がすむと、こんどは『あなたはお酒好きだから』と云つてウ井スキイを出して來て、小さいグラスに注いでくれた。それを一二杯あけたところに信義は議論が濟んだと見えて入つて來た。そして『僕にも一杯下さい』と云つて、グラスに手をかけた時だ。野枝さんは急に血相變へて怒り出した。『あなたに飲ませるつて出したわけではありませんこれは藥にするつて買つてあるのですから、それにこんなものを飲んで無駄口を利かれちやたまりませんから』全くお話にならぬ事を云つて野枝さんは信義につつかかつた。それを信義はきかぬふりで、自酌で一杯ひつかけて出て行つた。私は妙な氣になつて、もうあとのウ井スキイは飲む氣がしなかつた。

野枝さんが惡く云はれるのは此の邊のことだと想つた。野枝さんの無禮雜言と久太の讒訴とは、少くとも關西に於ける勞運社の友達もどれだけ多く振り落したことか分らぬ。だがそんな事はどうでも良い。勞運社が、いついつまでも勞働組合の旗手である限り、そんな友達なんかの失くなつた事は苦にもなるまい。悲しむほどの損失でもあるまい。

か横道に入つて、書きかけたことも忘れてしまつた。が野枝さんと私と話す場合は、いつもあまり浮き〳〵してはゐなかつたが、大杉の迎へに來た時など、身體の具合もあつたろうが、殊のほか沈み切つてゐた。大杉からの無線電信で、急に金の入用が出來て、京都のT氏の家まで行つてのかへり、列車の中で、野枝さんはいかにも淋しさうに『あなたは平塚さんを知つてゐますか？今のTさんの奥さんにそれはすつくりですよ。上方辯ことはちがひますが話の樣子からアクセントまで、本當によく似てゐます。』と云つてから『澤山お友達もあつたのですが何時の間にか離れてしまつてねえ』と云つたきり、眼をつむつて、なかに古い記憶でもたどる樣な風であつた。平塚さんと云つたのは雷島平塚明子さんのことだ。

私は大杉等が殺された年の十二月十六日、大阪の追悼會に行つて、追悼辭を讀めと云はれて、次ぎのような事を云つたが、今考へるといやな氣がする。やつぱり生きてゐてくれて昆虫屋にでもなつてくれた方が嬉しかつたと思ふ。良い死に方もへちまもあつたものじやない。今の私はそう思ふ。

『しようと思つても、ちよいと出來ない好い死にかたをしてくれた。悲しいことだが嬉しい。君達が血をもつて教へてくれたことは、ドサクサマギレには日本でもやつぱり、何んとか云つてはやられると云ふことだ。それで僕なんかには、この次ぎのドサクサマギレにはどうしたら良いか多少暗示された。好い死にかたをしてくれたる君達に厚く感謝する。』

＝寄贈雜誌新聞名＝

ゲエ・ギムギ・ガム・ブルル・ギムゲム（八月號）握手文藝（八月九月號）原始（八月號）
自我人（八月號）自然兒（八月號）無軌道（八月號）尖端（八月號）極東平民（八月九月號）中國評論第十六、十七號）
朝鮮勞働（九月號）解放新聞（八月號）勞働界（八月號九月號）勞働運動（八月號）組合聯合（九月號）失業檢對（リフレット）經濟運動と政治運動（大阪交通勞働パンフレット）階級と階級鬪爭（關東聯合リーフレット）
アルス新聞、春陽新聞、大鐵新聞、南海新聞、朝鮮日報

◻大杉榮著作年表

―神戸飜案社編―

・論文・

『生の鬪爭』― 雜誌「近代思想」その他で發表したものをあつめた最初の論文集。（大正三年出版絶版）

『社會的個人主義』― 「生の鬪爭」以後一ケ年間の論文をあつめたもの。（大正四年出版―絶版）

『勞働運動の哲學』― 第二次「近代思想」その他から、サンヂカリズムに關するもののみをあつめたもの。（大正五年出版―發賣禁止）

『クロポトキン研究』― 雜誌「改造」その他に所載のクロポトキンの思想を紹介した論文のみをあつめたもの。内二篇は伊藤野枝の文。大（正九年出版）

『正義を求める心』― 「クロポトキン研究」以前の三つの論文集から主要なもののみを撰び、これに雜誌「勞働運動」その他所載の新論文を加へたるもの。クロポトキン著「青年に訴ふ」の改譯を附錄とす。（大正十年出版）

『生の鬪爭』― 絶版になつた第一論集の名をとつて、第一、第二、第三の論文集中の粹を集め收めたもの。（大正十一年出版）

『二人の革命家』 伊藤野枝との共著。バクウニンとゴオルドマンを紹介したもの。（大正十一年出版）

『無政府主義者の見たロシア革命』― ボルリセヴヰキ革命政府の施政を批評したもの。附錄として、クロポトキン著「革命の研究」譯載。（大正十一年出版）

『自由の先驅』― 「正義を求める心」の姉妹篇論文集。（死後大正十三年出版）

・創作・

『獄中記』― 牢獄生活をありのまゝ書きつけた記錄。（大正八年出版）

『乞食の名譽』― 伊藤野枝との共著。短篇小誌集である。

『惡戯』― 日常生活の記錄隨筆集（大正十年出版）

『漫文漫畫』― 「惡戯」の姉妹篇隨筆集。望月桂の宣傳漫畫が添へられてゐる。（大正十一年出版）

『日本脫出記』― フランス行の見聞、感想記にマフノの紹介が收められてゐる。（死後大正十二年十一月出版）

『自叙傳』― 未完成の自傳。幼少年時代と飛んで葉山事件の記錄に「獄中記」の一部を合せたもの（死後大正十二年十二月出版）

・飜譯・

『萬物の同根一族』― ハワド・ムワド著進化論通俗話とも云ふべきものの前篇（明治四十年出版―絶版）

『物質非不滅論』— ギユスタフ・ル・ボン著「物質の發生と滅亡」中の一節「物質に就ての新觀察」の飜譯。(大正三年出版—絶版)

『懺悔錄』— ルウソオ著自傳全二卷の飜譯。生田長江との共譯で前篇が生田後篇が大杉の譯となつてゐるのだが、その大杉の譯と云ふのも實は全然代役だと大杉自ら云つてゐたもの。(大正四年出版)

『種の起原』— ダアヰン著、同名の書の飜譯。進化論のクラシックである。大杉は生前この書の改譯を志してゐた。(大正五年出版)

『男女關係の進化』— ルトウチノ著「婚姻と家旋制度の進化」の飜譯。(大正六年出版)

『民衆藝術論』— ロオマン・ロオラン著「平民劇場」の飜譯。(大正六年出版)

『相互扶助論』— クロポトキン著、同名の書の飜譯。生存競を主張する誤れる進化論の訂正。(大正六年出版)

『革命家の思出』— クロポトキンの自傳、同名の書飜譯。(正九年出版)

『人間の正體』— 「萬物の同根一族」に後篇を加へたもの。ハワド・ムウア著。(大正十年出版)

『昆虫記』— アンリー・ファブルの著、昆虫の本能と習性に就ての研究、同名の書全十一卷の第一冊。(大正十一年出版)

『自然科學の話』— アンリイ・ファブル著。科學小話集の飜譯安成四郎との共譯。(大正十二年出版)

『科學の不思議』— アンリイ・ファブル著。科學小話集の飜譯。伊藤野枝との共譯。(大正十二年飜譯)

・パンフレット・

『青年に訴ふ』— クロポトキン著。同名の書の飜譯。(大正十一年出版)

『革命の失敗』— バクウニンの革命觀を紹介したもの。(大正十一年出)

× ×

『婦人開放の悲劇』— エマ・ゴールドマン著。大杉と同棲する前の伊藤野枝譯。(大正三年出版)

『大杉榮全集』— 全十卷。以上の著書中にもれたものをも殘らず集めた全集。うち第一卷より九卷までは大杉、第十卷は伊藤野枝集。(大正十四年六月より十ヶ月間完成)

× ×

附記 勞働運動社編の著作年表を主として、これに二の單行本と二種のパンフレットを加へた。これで書物の形をした大杉のものは全部だと思ふ。が、新聞雜誌に比較すると甚だ不完全に思はれるから參考までに、主として大杉が出した宣傳雜誌の名稱だけを左に順番に書きけてをく。

—安谷—

近代思想・平民新聞・近代思想・文明批評・勞働新聞・勞働運動・週刊勞働運動・月刊勞働運動

同人の言葉

▼「祖國と自由」もヤツト二號が出る事になりました、が實の所僕等は最う雜誌を出す事が嫌やになつてゐるのです。

こんな事では、いけないのでしようが、雜誌を出すだけが我々の運動でないてな生意氣な考ゑを起こすと遂ゐ止めて了つた方が良い樣な氣になるのです、どうしたものかと今迷つてゐます。

「關西アドヴアータイザー」も豫告はしてありますが何時出る事か今では覺束ないものです。

▼「文明批評」と「祖國と自由」との關係に就て大ぶん間違つた事が傳ゑられてゐますから再び辯明して置きます。

「文明批評は」かなり以前から神戸の和田信義君が出してゐたのでしたが一時或る事情で出なかつたのです、で六月號を大串が協力して出したのですが、何處の雜誌社にもよくある樣な事情から六月號限り別れて私等は「祖國と自由」として出すし和田君の方は引き續き「文明批評」を出す事になつたのですが。和田君の方の「文明批評」が早く出なかつたので其内、以前同人であつた近藤某等二三の人々が種々と質の良くない宣傳や行動をやつた爲め「文明批評」と「祖國と自由」は種々の意味に於て迷惑を蒙むりました。先日和田君と逢つた時其間の事情が分明したので「文明批評」と「祖國と自由」の爲に特に此の一文を記して兩雜誌の立場を明らかにして置くと共にこうした仕事の裏面には常に良くないカキマワシをやつて仕事を防害する人がある事を發表して置きます。

▼「原始」の八月號に本社の大串が後藤君の詩集を出す樣に發表してありましたので各方面から答合せや注文がやつて來ますが、後藤君の詩集は本社と關係なく大串個人が加藤君と約束して出す筈だつたのですが、原稿の所有權を云ふ樣な事であの原稿を集めた人と加藤君との間に面白くない事が起りそうになつたので大串は斷然出す事を止めにしたのですでその事を本紙の餘白を借つてお答ゑして置きます。

▼僕達は、住吉、富田林の二つの事務所の他に今度堺に新らたに社を設けました、この方には丹君が居る事になつてゐて住吉、富田林と同樣文明批評社の各方面の仕事をやる事になつてゐます。

皆なさんが遊びに來て下さる事を嬉こんでゐます。

▼私達のグループは以前からの同人に新らしく朝鮮日報の崔善鳴と水平社の岩瀨久太郎福岡の庄野義信の三君を迎ゑる事になりました私達のグループは現在では左の九名以外には同人はありませんがら、特に御承知置きを希ひます。

石田正治、岩瀨久太郎、大西傳次郎、大串孝、丹吉三郎、能勢仁、崔善鳴、安達源、庄野義信。

▼崔善鳴君が、十三日頃から當地の鶴橋署で拘留されてゐます拘留された事情が未だ確かにならないものですから判明次第公表しますが、ここでは拘留されてゐる事だけを發表して置きます。

▼左の同人の内「祖國と自由」の編輯をやつてゐる者は、石田、大串、庄野、能勢の四名で外の五名は「關西アドヴアー」の方をやつてくれる事になつてゐます。

▲十月號休刊……

▲十一月號原稿〆切十月十五日限り……

編輯後記

最初に、本追悼號が、豫定の日に出なつた事を、お詫びしなければなりません。

編輯員は、可なり前以つて、準備をして豫定の日に出さうと努力したのですが、原稿〆切り間際になつて、中濱君の原稿が刑務所と裁判所で檢閲される爲め、遲くなつて着せず、止むなく發行日をズット後くらし大杉君の斃された日に出す事にしたのです。とても初に計畫してゐた程充分なものになりませんでしが、どうにか見て頂ただいて耻づかしくない程度に出來上れたと自負してゐます。

本追悼號の原稿中加藤、新明、五十里、和田、平塚氏等の分は神戸の安谷君の手に依つて集めて下つたものです、其外「改造」からの切拔き等も同君の思ひつきで載せる事にしました。

こんな事で本追悼號を出すに際しては特に神戸の安谷君が多大の努力と援助をして下すつた事を深く同君に感謝してゐる次第です

本追悼號は部數が少くないので充分に皆樣に行き渡らないと思ひますから賣切れない内に早くお申込み下さい。

尙ほ雜誌代はなるべく前金にて拂込み下さる樣お希ひします。

前號の表題獨文に誤植のあつたこと注意して下さつた方がありましたが、印刷が全部出來上つた後に氣着きましたので何うすることも出來ませんでした。全く編輯係の手落であつた事をお謝びする次第であります。

本特別號　四十錢

祖國と自由

價定		
一冊	廿五錢	郵稅共
半年分	一圓四十錢	
一年分	二圓七十錢	

▲本誌の注文は前金

▲送金は小爲替又は郵券

廣告料は御照會次第御問答申上ます

大正十四年九月十五日印刷納本
大正十四年九月十六日發行

發行兼印刷人　大阪府南河內郡新堂村字新堂一二〇四　石田正治

編輯人　大阪市住吉區住吉町一六七　大串孝

發行所　大阪府南河內郡新堂村字新堂一二〇四　文明批評社

印刷所　大阪市浪速區櫻川町一丁目　岩出印刷所（電櫻川一三一四）

發賣所　大阪市住吉區住吉町一六七　文明批評社

新堂水平社同人

大谷照治
中島半次
北井正一
坂本岩雄
山谷一光
坪井德光
北田勇
木下一郎
森井信一
和藤井一郎

辯護士　白畠正造

堺市宿屋町西一丁

醫は仁術

湯山醫院

大阪住吉公園高燈籠西入ル

洋酒　ヨバタ

平鹿洋酒店

北新地

薬品
化粧品
カフエー

EBCファーマシー
神戸元町三丁目（電三宮六〇六）

東洋のマンチエスター大大阪を繞る六大交通網

南海鐵道株式會社　南海電車

阪神電氣軌道株式會社　阪神電車

大阪電氣軌道株式會社　大軌電車

阪神急行電氣軌道株式會社　阪急電車

京阪電氣軌道株式會社　京阪電車

大阪鐵道株式會社　大阪鐵道

民事
商事
刑事

辯護士　益野豐法律事務所

事務所（南區安堂寺橋道一丁目安堂寺橋ビルヂング十七號　電船場（三三六五）（四四八二）

||紹介不要||

明治廿九年創立
頭取　越井醇三
株式會社　富田林銀行
南河内郡富田林町

資本金二千二百萬圓
頭取　廣岡惠三
株式會社　加島銀行
大阪肥後橋南詰